
神楽家三人兄弟。

蓮華永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神楽家三人兄弟。

【Zコード】

Z83330

【作者名】

蓮華永

【あらすじ】

神楽家の長男であるはずの白夜は何時も弟達に下僕扱い。父と母はもう、そんな白夜に呆れているし!!!

そんな三人兄弟が織り成す、楽しい楽しい日常コメディ。

「一番弱い長男日記」の続編!!!

初めまして。俺の名前は神楽白夜かぐらびやくやです。タイトル通りの三人兄弟で、俺は長男です。

知っていますか、皆さん。幾ら長男でも、威厳いげんが有るというわけでもないんですよ。以前、此の作者が投稿した、「一番弱い長男日記」を読めばわかるんですが、俺は一番上ですが、一番弱いんです。家族の中でも一番強いのは、父の勺夜じょうや、次が母の緑蘭りょくらん、その次が次男の赤夜せきや、で次が三男の黒夜くろや。俺は一番弱いんですよ。

「おい、馬鹿弱白夜！！ お茶持つてこい！ お茶あーー！」

「お前は何処ぞのやーさんかー！」

「口應えすんなあ！ 俺に勝つてからにしろおーー！」

「お前それ、無理つて知ってるよなあーー？」

とこんな感じに弟に下に見られます。本気で泣きそづ。。。

1話（後書き）

はい、短編に投稿したものの、続編です。
友人が連載しろ、と五月蠅いので・・・。
私も気に入っているので、これからもよろしくお願いします。

「兄さん。『コアを飲むだけで、何でこんなにもキッチンが汚れるのかなあ・・・?』

ヤバいです。我が弟、赤夜がモノすつごく怖いです。・・・顔が。
「御免さないいいいいいいいついいいいいい

からだ。

好アリマシタ』

赤夜サマ、今おとなしくを一回言いましたよね？

ガッシャーン！！

俺は今、盛大に転びました。ついでに今の音は皿が割れた音です。ヤバい。後ろを振り返ることが出来ない。だつて、赤夜がさつきよりも殺氣を出しているから！！　怖い！　我が弟ながら物凄く怖いです！！

「兄さん・・・・・。今からすぐに部屋に戻つて、勉強をしなさい。僕がいいよ、と言つまで、絶ツツツツ対に部屋から出ないで・

•
!

「は、はいいいいいいい！」
俺はダッシュで部屋に戻った。

盛大に転んで、顔をすつてしましました。ですが、今は痛みにからまっている時間などないので！ 今すぐ立ち去らなければ、俺は死ぬ！！

「二回も転んだよ・・・・・。大丈夫かな？」

何時も、なんな風に怖がられてるけど、本当は僕は兄さんの事が大切なんだよ？きっと兄さんは僕が兄さんの事が嫌いだと思つているんだろうけど、たつた一人の兄をどうやつたら、嫌いになれるんだろうね。

僕には、兄さんも黑夜も居ないときつと壊れてしまつだろうね・・・。

兄さんは僕が大切にしていることを知らない。
教えるつもりはないけどね、あんな馬鹿に・・・。

2話（後書き）

赤夜は兄思いなんですけど、それを表に出さないんですよ。

まあ、一言で言ってしまつたら、捻くれた愛情を兄に向けているんですよ。

意地つ張りなんですよ。

俺の兄は赤夜兄だけです。え？　白夜？　そりやあ、もちろんあ
いつは「下僕」ですよ。

「黑夜！ それは激しく酷いと思つんだ！…？」

「お前、勝手に人の脳内でじやねえよ!! 殺すぞ!!」

黑衣

あ
御免
え
と
兄さんか

「御免。僕にほこの言葉は重過ぎた……」

卷之三

「ねえ、貴方・・・。私、余りにも白夜が可哀想に思えてきたわ・・・。

2

「貴方に言つた私が馬鹿だつたわ・・・」

3話（後書き）

家族全員出してみましたあ。
楽しいです。
なんだかんだ言つて、一番酷いのは父。

可愛い息子。

よく言つわよね。可愛い子には旅をさせよつて。

「うーん、おまかせだよ。」

「え?
厭よ?」

即答されました。悲しい事かな
・・・。

貴方が黒鹿みなしはてんてこ舞いしてゐるのか

「褒めてないよねえ！？」

よねえ！？

「櫻花」の歌詞

御免なさい！！！私は嘘かつけないの！！！御免さない、白夜！！

「アーティスト一覧」

そ、たそ
白夜のくせに……！」

「**事実を述べたださだ！！！**

「それは宣言しないでえ――――――――――」

本当に此の子を舐めていると楽しいわーー

「母さん・・・」

そんな緑蘭を匂夜は溜息をついた。
ついでに、白夜の弱さに呆れながらも・・・。

4話（後書き）

幽さんは虐待じゃなくて、愛なのですよ！
あれが愛だと自分は生きていけませんが・・・。

我が息子ながら・・・。

可哀想だなと思つ。

白夜は髪が長い。
理由。母さんに一番似ているから。ついでに母さんが娘がほしかったから。

一いつには普通、次男とか三男とかが犠牲になりそうなんだが、一番顔が似ていて、女顔の白夜が犠牲になつた。

中学の時は、自分の父親の権力で教師達を黙らせた。
権力を行使してんだよな、緑蘭は・・・。

「ぱぱー。御本読んでー」

「白夜。いいぞ、読んでやる」

「わーい！」

白夜、可愛いとは思つ。「読んでー」とお願いする、姿は可愛い。黑夜の下敷きになつていなければ・・・。

一いつか白夜。何故お前は黑夜の下敷きになりながら、笑顔でお願いをする。

そして、赤夜も乗らひつとするなよ。

「グヘヘ！？」

白夜――――――

「二人共どいてあげなさい」

「はーい」

ああ、白夜が咳き込んでる。そりゃつらいだらうな。

「大丈夫か？ 白夜・・・」

「大丈夫に見えたから眼科行つてきて・・・ぱぱ・・・」

「そうだな」

5話（後書き）

白夜つて
勺夜つて
・・・・。

6話（前書き）

本日は畠でお買い物に行つた時のお話。

店員さん視点。

ぱつと見の印象。

可愛い女の子。

「せきやあー、くわやあー、ぱぱー、ままー。何処ーー？」

田とピンクのロコータにピンクのリボンのカチューシャを付けた、女の子が泣きながら、てこてこと歩いていた。そして、次の瞬間、転んだ。大丈夫かな？ 何か、唸つてる・・・。

「どうしたの？ 迷子？」

「うん・・・。ままだと離れた・・・」

きゅん！

可愛いです。物凄く可愛いです。このままお持ち・・・は！ 待て、自分！ 此処まで来て犯罪を起しそうとするんじゃない！！

「迷子センターは三階・・・。それまで探しながら私と行こうか？」

「うん！」

きゅん！！

何此の子ー？ 本氣で可愛いー！

「お前は？ なんて血つの？」

「びやくやー」

「くえー・・・」

正直言つて、男の子っぽいなと思つた。まあ、可愛いからいかな。

「まあー、ぱぱー。せきやー、くわやー。何処ー？」

後二人の名前が不可解。

「わせや馬鹿とくのや馬鹿ばびやへやひやさんのお兄ひやん?」「ひつさ。衆」

「……………。やつは此の子幾つ何だらひ…………?」「弟かあ…………。やつは此の子幾つ何だらひ…………?」

「ねえ、びやくやひやん。今幾つ?」

「え? 七歳」

「やつ」

「にしては、小ちこ氣が…………。まあ、女の子だし、いいかな?」

「其の服可愛いね」

「うん。ままの手作り――!」

母凄お!?

何! 此の子母手先器用にも程があるでしょ!!? 何!? デザイナーか何か!?

「お母さん、凄いねえ!」

「うん。僕の血漫なの!」

・・・・・・・・・うん? 今僕って言つた? や、でも聞き間違いかも知れないし……。

「あ! 居た!!!」

「! セキヤア――!」

「もう、勝手に居なくなつたりしないでよな……。心配したんだよ・・・・・・」

「ちんたらしてんじやねえよ、此のくせ馬鹿兄貴――!」

「げふう――!」

ちよ、今見事に此の子の蹴りがびやくやひやんヒッシュしたんだけど――?」

「済みません。うちの子供が迷惑をおかけしたよつで……」

「済みません……」

びやくやぢやんの両親らしき人達が走つて来た。

「いいえ。それにして也可愛い娘さんですね」

「ふつ！」

何故？

卷之三

「何? ぼく」

「済みません。あれ、男です」

「うん！ 僕男だよー」

卷之三

済みません!!! 勝手に女の子と勘違いしてしまって……

男の子だったのね。..。.
吃惊だわ。..。

「あつたねえ。そう言えば」

「あつたな
「懐かしいわねえ
・・・
」

「懐かしいな

6話（後書き）

白夜はあほな子です。
迷子になつてました。
それで一時期、外に出るのを禁止せられたり・・・。

「なあ、神楽ー。此の写真の女人誰だよー？」
「へ？」

見てみたら、友人が僕の携帯を弄つて、勝手に写真を見ていた。
(何時殺そつ……。)

それは、置いといて、多分今、あいつらが見ているのは……、兄さんの写真だ。

やつぱり。案の定兄さんのだ。

「ああ……。それは……」

待てよ。此処で黙つて、会わしてあげて、あいつらが絶望する所を見るというのも、楽しいかも……。

僕はそう思つて、悪辣に自分でも悪いと思つ程の笑みをした。

「会わせてあげよっか……？」

「マジでー?」

「うん。僕の家族だから……」

「やつたーーーー！」

馬鹿な奴ら……ー！

「ただいまーーー。ちょっと此処で待つてて……」

「判つた」

友人達はちゃんと返事をした。

「兄さん……。ちょっと、頼みがあるんだけど……。いい?」

「ん?
何だ?
別にいいが
」

「じゃ、来て……」

兄さんはこいつこいつ時便利だなと思う。本当に……。

—はい。お待たせ—

- 一
- 二
- 三
- 四
- 五
- 六
- 七
- 八
- 九
- 一〇
- 一一
- 一二
- 一二〇

友人達は黄色い声を上げた。男があげると氣色悪いな。

「初めまして、赤夜のお友達?」

「そつか。何時

夜です。よろしくね？

「？」兄？

「うん?
そうだけど……？」

さあ—みやがれ。此の愚民共が・・・!! 僕の兄さんに手を出

せんなんじでみん

駆しやがたな——！」

「騙すも何も、僕は兄さんが『女』だとも言つてないし、『男』だとも言つていなーい? そつちが勝手こ勘違ひしてたどナジやない

か

「「ウグ
！」」

ほら、図星。今更気がついたのかな？

僕が肯定も否定もしていいと……。 今更気が付いたのかな？

本ッツツツツツ 当に馬鹿な奴ら……。

7話（後書き）

赤夜が黒い……。

怖いが、其処を抜けば、ただのプログラマー……。

8話（前書き）

三人のテストのお話。

母視点。

此の前、定期テストがあつたはずだから、三人共テスト持つて帰つてくるわよね・・・。

「　　ただいまー　」

「あら？ 御帰りなさいー」

「母さんハイ、テスト」

「母さん俺のも」

「はい」

赤夜と黒夜は素直にテストを出してきた。よしよし、一人共90点以上ね・・・・・。

「で？ 白夜は・・・？ テスト・・・・・、お出しなさい・・・・・私はニッコリと笑つた。白夜は「ひいいー」と言つて、渋々と言つたいでテストを出してくれた。

「平均で45点・・・。何時も通りね・・・・・・

「うう・・・」

「流石兄さん、馬鹿だね」

「つづりう・・・」

「馬鹿白夜」

「ううづう・・・」

「　　ハイー・・・」

「　　うわあああああん！　」

ああ、何時も通り此の子を虐めるのは楽しいわーーー！

8 話（後書き）

四七一——ん！

まあ、白夜を虚めているのは、他でもない作者である私ですが……。

9話（前書き）

今日は白夜の授業参観。
白夜視点。

大丈夫。今日の授業参観は母さんにしか教えていない！だからあの一人が来ることは絶対に無い！ とりあえず落ち着け俺！

今日は授業参観。授業参観の思い出と言えば、何故か俺の授業参観の日は絶対赤夜と黒夜が来ていた。だから、今回は母さんしか居ないときにプリントを見せて、すぐさま捨てた。なのであの一人は来ない。・・・・・、多分・・・・・・・・・・・・・・。

「なな、神楽！ お前の母さん来るんだろ！？」

「？ うん。父さん仕事忙しいから母さんが来るけど・・・。それがどうしたのさ？」

「いや、ほらお前の母さんものすっげえ美人じやん！ だから見たいなあと思つてよ・・・」

「ふーん」

確かに母さんは美人だ。だが、恐い、怖い。物凄く恐い。美人ほど恐いものは無い。だって、赤夜も母さんと父さんを足して割ったような、綺麗な顔してるし、黒夜は父さん譲りだし。だから、綺麗な顔の人程恐い人は居ない。

何故だ・・・。何故此処にあの一人が居る。しかもクラスの女子達は何か黄色い声あげているし。俺はちょっと後ろを見ると赤夜が気づいたようにニッコリ笑つた。後ろからオーラが・・・！ 物凄くどす黒いオーラが出ている！－ 怖い！

「神楽。此処の公式言つてみろ」

「ほへ！？」

ちょ、先生何指名しちゃつてんですか！－ しかも俺の苦手な数学でよりによつてあの一人が居る時に当てなくていいじゃないです

か！
ぞ。
ビリしようつ。此処は素直に言つた方が、多分変に怒られない

す・・・、済みません。判りません・・・」

さて、言つたのはいいが、後ろのオーラがさつきより三倍増して怖くなっているんですが。どうしよう、もう後ろ向けない。こういう時一番怖いのって赤夜なんだよおーー！だから授業参観にいい思い出がないんだよーー！ 何で俺等違う学校何だら・・・。と言つても俺だけが公立何だよな・・・。

「よし、神樂。わざきよりも簡単だ語りてみる」

ヒイイイイイイイイイイイイイイイイ！ う・・・・、後ろが・・・
、オーラがさつきの六倍増し怖くなつた！ 本気で後ろ振り向けな
いいいいい！ 絶対赤夜笑つてゐううううううう！ 怖いいい

「白夜、あれど、ちゃんと判りなきや駄目でしょ。」
「うむ」

「それより母上様。何故、赤夜サマと黒夜サマまで授業参観に来て
いたんですか・・・？」

「二人共創立記念日でお休みだつたのよ」

「そうでは無く。俺はプリントを母上様に見せた後速攻で捨てたの

「ああ、私が教えたのよ。一人共今日はずっと暇だつて言つし、せ

つかくだし行く？ つて聞いたら、二人共悪辣に笑つて行きたいと

言つたわ

「母上え――――――！」

追記。

赤夜が怒つていた本当の理由は白夜が言えないと言つた時周りの奴らが笑つていたからだ。まあ、それを白夜が知る由もなければ、知る必要もない。

9話（後書き）

本日は結構長かった・・・。
でも、書いていて楽しかったです。

10話（前書き）

友人に頼まれまして・・・。
リクエスト更新。

他にもこんな風に書いてほしい、こんなのを書いてほしいといふものががあればリクエストお願いします。

「兄さん。悪いけどお使い頬んでいい？」

久方ぶりに赤夜が頼みごとをしてきました。

「別にいいよ？ 暇だつたし……」

そう言ってやると赤夜は淡く微笑んだ。

「有難う。じゃ、此れ頼むね」

「ん、じゃ行つてくる」

「よろしく……」

それにしても久しぶりに買い物行くなあ……。行くとしたら何時も母さんの荷物持ちだつたし……。確かに今日チラシ見た限りだと、肉が安かつた。多分赤夜の事だし、肉巻き野菜を作るに違いない。あれ『いんだよなあ……。流石赤夜、母さんより料理が上手なだけある。多分此れ言つたら殺されるよなあ俺……。

ふはっ！ やつぱりメモに書いてあつたよ、肉！ 予想通り。流石赤夜サマ！！ さ、買おう。で、次は……あれ？ もしかして今日はジャガイモ巻くのかな？ あ、でも……。早く食べてー。

よし、買い物完了！ さつさと帰ろう。腹が減ってきた。

俺は歩きだしたと同時に人にぶつかる。

「あ！ す、済みません！！」

「ああ！？ と、何だ結構可愛いじゃねえか……」

男は何か呟いたみたいだけど、それは聞こえなかつた。

「ねね、俺達と一緒にお茶しないー？」

「其処にちょうど喫茶店あるしさ。ね、行こうよ?」

「へ？　へ？　あ、あの・・・えと・・・」

「ヤバい。不審者だ。しかも質悪そうだな・・・。どうしよう遅れ

たら赤夜に怒られる・・・！　早く帰らないと・・・。

「す、済みません！　あ、あの離してくれませんか？　早く帰らないといつけてないので・・・！」

男一人は肩に手を置いてきた。やばい、気持ち悪い。

「そんなこと言わずにさ。其処でちよつとお話しするだけでいいからさあ・・・」

「なあ・・・」

「や、止めて下さ〜・・・！」

「ねえ？　其処までにしてくんないかな・・・。いい加減殺すよ？」

「！」

「赤夜！？」

「赤夜！」

ヤバい。怒られる。軽く殺人予告したよ、赤夜サマ・・・。本気で怒つてるしい！　赤夜は俺の傍に来ると男の手を払い落した。

「其の汚い手で馴れ馴れしく触んないでくれる・・・？　穢れる・・・」

赤夜、お前自分から触ったのにその言い草は余りにも酷いぞ。まあ、殺されたくないので言いませんが。

「悪いけど、先帰つてて。ね？　お願ひ」

「う・・・、うん・・・」

俺は赤夜が珍しく懇願してきたので帰つた。

その後、何があつたのかは知らない。ただ、赤夜に頬に返り血みたいな赤黒いものがついていたが気にしない。俺は気にしない。

帰りが遅かつた、だから心配になつて行つてみた。そしたら、兄さんが汚い男どもに絡まれていた。兄さんの肩に置かれていた手を見て、完全に切れた。頭の中で何かがキレる音がしたのを自覚したから。兄さんは自分が遅くなつたから怒つているんだと勘違いしているようだけど、それならそのままでいい。知らなくていい。

もちろん兄さんを帰した後は、僕の兄さんに手を出したわけだから、それなりの報復を受けてもらつたよ。
ああ、面白かつた。

1-0話（後書き）

赤夜の「ラブコイン」話でもあるよね、此れ・・・。
赤夜の「ラブコイン」つぶりには作者である私も驚きます。

11話（前書き）

皆で御買物。

白夜、赤夜、黒夜の三人。

此の三人で行つたらどうなるんだろう・・・。

今日は母さん達が2泊3日の旅行に行つてゐるため、俺達だけで3日間やりくりすることに。まあ、主に赤夜がやるんだけど……。二の方方が学校終わるのが早いので迎えに来る。三人でこの後買い物に行く。

「兄さん、遅いよ？ 待ちくたびれた」

「遅いぞ、白夜」

「御免二人共……」

俺が校門に行くともう一人が居た。俺は途中で走つたので少し息を切らしながら謝つた。

「じゃ、行こうか」

「行くぞ白夜」

赤夜は笑つて、黑夜は仏頂面で俺は微笑んだ。俺は単に嬉しかつた。こうやって三人そろつて出掛けれるのが……。ただ、ただ嬉しかつた。

「ねえねえ、神楽君！ 其の人達御兄さん！？ かつこいいね！」

「え……」

「・・・・・」

後ろから声をかけられたので、振り返つたらそんな事を言われた。俺はもう聞きなれたものだと思つていていたけど、こうやって久しぶりに言われるとつらいかも……。

「兄じやないよ。此の子たちは俺の弟」

「え！？ そうなのーー！ 全然似てないし、弟さんたちの方が格好いいねえ……」

「ズキッ……」

あ・・・・、やつぱりつらいや・・・。あんまり言わないでほしい

なあ・・・・・・。また、赤夜達に馬鹿にされそう・・・。

「あのう、よかつたら是から御茶でも行きませんかあ？　すぐ近く

にあるんでえ・・・・」

「御免ね？　僕君みたいな女の子、大ッツツツツ嫌い」

「え・・・・？」

「俺も嫌いだ。幾ら馬鹿兄貴だけど其処まで馬鹿にされるのは気に食わねえ」

「・・・赤夜・・・・？　黒夜・・・・・・・？」

「「行く（よ・ぞ）。兄さん」」

「・・・・！」

黒夜が久しぶり・・・・、と言つた初めで『兄さん』と呼んでくれた・・・。俺は嬉しくなつて笑つた。赤夜が淡く微笑んで、黒夜は恥ずかしかつたのか頬を少し赤くしている。

「あり・・・がとう・・・・・・。二人共・・・・」

俺がそう言つと一人は完全に笑つて、振り向いてくれた。

楽しい、嬉しい、三人で居られることが、一人が居てくれること
が俺にとっての幸せだ・・・。

1-1話（後書き）

少しシリアスですが、兄弟愛？が確かめられる話です。
多分次の話と続くかもしません。
其の時はよろしくお願ひします。

1-2話（前書き）

御買物編2。

「ハイ。兄さんは卵持つてきて。絶対に転ばないでよ？」
「判った。行つてくる」

判た行くべく

黒夜は此のメモ通りの物をそろえてきて

判つた上

赤夜元はできはきと指示を出して、俺たちに持ってきてほしいものと言う。これ本当に買い物か？まあ、それは置いておいて、とりあえず、今日は久しぶりに三人で買い物。なんか地味に嬉しかつたりする。

赤夜兄、此れ全部持つてきた

あ、有難う黒夜。・・・・・兄さん大丈夫かな？

・・・・・、鈍臭いからな・・・・・・・・・・・・

赤夜一、黒夜一。持つて来たよー。割らずにー

— ! ? 「

本当に！？ 割ってないの本当にッ！？

マジかよ！ 明田槍降ってぐるぞ！！
あおげさ

二人共、大袈裟だよ。・・・・・

——其れ程の奇跡（なの・なんだよ）——

俺と赤夜兄は本気で吃驚した。
運動能力皆無の白夜が卵を割らず

「はい、今すぐ使わない食材は冷蔵庫の中に仕舞つて。何でもかんでも仕舞うんじゃないよ。判つてる？」兄さん

「それぐらい判つてゐる……。それぐらい出来

「ほら、お前がちんたらしてぬつちこむつ仕舞つたぞ」

「黑夜早つ！？」

「俺はお前と違つて出来た人間だからな。
「さいですか・・・・・」

白夜はズーンと項垂れ、ソファに移動し、体育座りし、丸くなつた。・・・・・餓鬼かあいつは・・・・・。

「さて、黑夜有難う。テレビでも見てて。出来たら呼ぶし」

うん、判つた

俺は言われた通りにテレビを見始めた。白夜はそれに気付いたのか一緒に見始めた。俺は白夜の横顔をジッと見た後、手を伸ばし・・

一
いや
何となく

白夜の頬を引て張った
案外柔らかかった
むにむにしてる
このホントは男か?

「お前が曲にこ麿つてア懶」。一ノ瀬。『西行狂歌』

卷之三

卷之二十一

「同上」

奄は悪凍こ笑ひながつ

俺は悪辣に笑いかひ緑
緑　横　横　丈かしてせよん　をやり
続けた。結構楽しい。

て
！
！

「いいなー、黒夜。僕もやりたい」

「……？ オルフー？」

「後で赤夜兄もやれば？」「結構楽しいよ・・・」

是は結構なお勧めだ。
しかし、家族以外の奴らに教えるつもりは

無いが。強いて教えていいのは歳の近い親戚ぐらいだな。

1-2話（後書き）

今日は黑夜。

明日に続きます。

明日は赤夜視点！

多分です・・・・・。

1-3話（前書き）

昨日は学校を休み、PCが使えない状態で更新出来ませんでした。
済みません。
では、本日は御買物編終了。
赤夜視点。

久しぶりに三人で買い物をした。物凄く、楽しかった。何よりも、兄さんが転ばずに、卵をしかもついでに割らずに持つてきただのが奇跡。きっと母さんと父さんに言つたら、泣いて兄さんの頭を撫でる。絶対に撫でるよ、あの一人。

「兄さん、風呂上がつたよ。入つてきな」

「あ、はーい」

兄さんは子供みたいにしててつ、と走つて、滑つて転んだ。うん、

微笑ましいね！！

「うう・・・、痛い・・・・・」

「普普ッ・・・・、兄さん・・・・・・だい、じょ・・・うぶ・・・・・

・・・？」

「笑いながら言つなーー！」

「いや、だつて・・・・！　普普ッ・・・・！」

「もう、いい！」

ああ、拗ねなかたも子供っぽいや・・・！　ホント、可愛い兄だな・・・・・・。小さいころから、近付く男（兄さんを女だと勘違いして）、女は徹底的に排除してきたんだよねえ・・・。

「赤夜兄い、皿洗い終わつたよ」

「あ、有難う。御免ね？　任せちゃつて・・・・

「いいつて、たまには頼つてよ。ね？」

「うん」

ああ、本当に黑夜は素直だなあ・・・。そついやあ、黑夜に近づく女共も排除してきたつけ？　ま、いいや。

「ん・・・・・はあ・・・・・なんか何時もの倍疲れた気が・・・・・

・

気の所為だね。

1~3話（後書き）

赤夜はもうただのパソコン。
一番恐ろしいパソコン。

当初の予定ではこんなパソコンではなかつた。

「赤夜、悪いけど、今すぐ彼女を作ってくれないかしら……」

人が起きてきて一番最初にかける言葉だっけそれ？ 否、物凄く違うよね！？

「赤夜、頼む」

父さんまで…………なんか、あつたのか？ 二人共深刻な顔してるし……。

「何があつたの？ いきなりそんなこと言つてくるなんて……」

僕は恐る恐る聞いてみた。すると返つてきた答えは……。

「「ただ、娘が欲しいだけ（だ・よ）……」「

「ふざけるな！－」

何考えてんだよ、此の二人は……

事の発端は、母さんの姉、白蘭さん^{びやくらん}の何氣ない自慢だった。

『実は、娘がもう一人出来たのよ！ まあ、うちの息子のお嫁さんなんだけど、それが凄く可愛くて……』

白蘭さん……！

「母さんが懇願するのまだ、判るけど、何で父さんまで懇願してくれるの？」

「ああ・・・、それはだな・・・・・・・」

父さんは一呼吸置いてから言った

「もう、本当に白夜が氣の毒過ぎて・・・・。何と言つか我が息子ながら、可愛いとは思つ。だが、これ以上はちょっと・・・・」

納得いたしました。それに僕も同意です！」

どしようつ、物凄く父さんの気持ちが判る。だけど、僕も兄さんが可愛い恰好してるのは結構好きなんだよなあ・・・。困惑している姿が何とも言えない・・・・・。まあ、今はそれは置いといて。

たからで 何で僕なの？

「だつて、貴方、白夜と黑夜の近付く者は片端から排除してきたじゃない。だつたら、貴方が一番いいのよ」

そうだけどさあ・・・。だからって何で僕？まあ、確かに一人に彼女が出来たら、陰から攻撃して告げ口も出来ない様にして、精神的に弱らせて別れさせるけどさあ・・・。

「厭だよ。もし、僕に彼女が出来たとして、其の人が一人に惚れた
ら厭だもん。絶対に作らない。一人にも僕の目の届くうちは絶対に
作らせない」

「うーん、どうも、僕の手で作られた物には、僕の想いがこもるんだよ。だから、僕が作つて其の人があなたのうちどちらかを好きになつちゃつたら、意味が無い。だから、僕が絶対に作らせない。

「…………そうだわ！ 取り敢えず一人に、彼女欲しいか聞いてみようかしら！？」と言うかそうした方がいいわ！」

い、行くわよ！ あなた

「 しうつがなことよ・・・・・・・・

結果。

「え？ 彼女？ 要らない

「彼女なんか要らない」

母さんは泣いた。息子たちの余りにも薄情さに・・・・・。
父さんは黙った。余りにも母さんが哀れ過ぎて・・・・・・。

14話（後書き）

珍しく、赤夜が弄られました。
結構弄るの楽しかった・・・。

「兄さん、暇なら一緒に買い物行こうよ」
それは久しぶりの赤夜からの誘い。

俺はそれにパアアと顔を輝かせ、大きく頷いた。
「行く！！ 一緒に行く！」

「じゃ、準備して。僕玄関で待ってるから」
俺は急いで準備をした。

「兄さんがまた、転ばなかつた。吃驚」「
其処まで？ 其処まで吃驚するもの？」

「するもの」

俺は深く考えた。俺が転ばないことがそんなにも珍しいのだろう
か・・・？ 前の買い物の事を赤夜が母さん達に言つたら、母さん
達は泣きながら俺の頭撫でてくれたつけ？ 何でだろ・・・？

「今、母さん達が何で前に泣きながら頭撫でてくれたのか考えてた
でしょ？」

「うつ・・・・・」

思いつくそ図星を突かれた。

「それは、ただ嬉しかつただけだよ。兄さんが転ばなかつたから、
それが嬉しかつたんだよ・・・」
「・・・・・・・・・・・・・」

俺は思わず赤夜の顔を見た。赤夜は俺に微笑んでくれた。

俺はどれだけ、馬鹿にされてんだろう・・・・・・・・・。

俺は今、そう思つた。

あれ?
神楽じやん

あ 赤夜ちゃん

四二

俺と赤夜はハモった。たゞて、目の前には男一人が居て、そのうち一人は、俺の友達で、もう一人は一度だけ観たことがある、赤夜の友達。・・・だつたけ？

何だ？！
赤夜の機嫌が一気に悪くなつたよ
てないけど、笑顔が怖くなつてゐる。これは身内にしか判らない、違
いである。

「何何此の人赤夜の彼女?」

「刀のミソ。義母の矢張り」

「はあ、弟! ? マジド! スツデエ

あーあ、また痛い。ズギッと痛む。こんな顔、見せられない

夜に馬鹿にされる。

גַּם־בְּעֵד־כֵּן אָמַרְתִּי לְפָנֶיךָ וְלֹא־יָמַרְתָּ

赤夜は何かを呟いた。俺はそれを正確にとらえた。ああ、幻

赤夜は何かを呟いた。俺はそれを正確にとらえた。ああ、幻滅された。もっと前からだつたけど、もっと幻滅されたや……。

一 濟みません。用が無いのなら、帰らせてもらひでねといひです

卷之三

か。 但てお前者の風は他へ行儀がんば

マツバヤ。赤夜が完全二刃式。赤夜両刃式。

卷之三

「大体、さつきも言つたが、用が無いんだつたら、声、かけてんじ

「おおむね」

「つんだよ・・・！ 気分悪ッ！ 帰らひづぜ」

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

あ、帰った。流石に此の時の赤夜に声はかけられない。きっと、赤夜から声をかけてくるはずだから、其の時を待とう。

「兄さん・・・・・・。帰ろつか」

あ・・・、笑つてる。本当に笑つてる。赤夜の笑顔の中で一番綺麗な微笑み・・・・・。俺は此の微笑みが大好き。

俺は笑つて返事をした。

15話（後書き）

友達などが出ると、大体、シリアルになっちゃう。
悲し過ぎます。

「おじやましまーす」

今日は厭厭友達を連れてきた。

自分の家に友達でも、他人を入れるのは厭だつた。でも今回は赤夜兄が許してくれたから、何となく、厭厭連れてきた。

「黑夜、お帰り。あれ？ お友達？」

「あ、白夜。帰つてたのか。そ、俺の友達。赤夜兄が珍しく許してくれたから、連れてきた」

「そつか、今お茶準備するから」

白夜はリビングのドアを開けて、キッチンへ向かつた。

白夜が行つた後、友人が俺の方を勢いよく向いた。

「誰！？ 今の誰だよ！ モノすつごく綺麗じやん！」

ああ、勘違いしてる。絶対に勘違いしている。確かに、今日の白夜は男モンか女モンか判らない中性的な服を着て（しかもゴス系）、髪を横で括つているが、あいつは男で、俺の兄。どうしよう、教えようか、教えまいか。教えないで、こいつが勘違いしたまま、白夜に襲いかかつたら、こいつは後で赤夜兄に殺されるし、でも、教えてもなあ・・・・・・。

「まあ、俺の家族」

「何、妹！？」

「否、上」

「へえ）・・・」

これなら後で色々言える。

「黑夜、お茶持つて來たよ

俺は思つ。原因は外見だけでなく、口調にもあるんじゃないかと。こいつ、男のくせに丁寧だし。あ、赤夜兄もそうだな……。切れたら悪くなるけど。

「有難うござります！」

「サンキュー」

白夜は俺の友人に微笑み、退室した。やっぱ、勘違いされるのは、自業自得だと思う。

「やつべえ位綺麗だな！ 彼女にああいうの欲しいい！！！」

「まあ、いいだろうな。ああいう『女』が居たら……」

俺は友人に同情の笑みを向けた。

「黑夜、ただいま、お帰り。其の人気がさつき言つていた友人？ 初めまして、黑夜の兄の赤夜です」

「は、初めまして」

赤夜兄は友人に笑みを向けた。友人は赤夜兄が男と忘れて、頬を紅くした。赤夜兄は一瞬眉毛をピクッとさせたが、すぐに笑って、退室した。

「お前の姉さんと兄さん綺麗だな」

「おう、有難う」

「どつちも男だけどなッ！！

「さて、今更だが、あの一人に自己紹介もう一回して来い。一緒に行くから」

俺は二ツ「リ笑つて言つた。ああ、此の後どうなるか、手に取るように判る。

「マジで！？ 行く！」

「初めてまして。『兄』の白夜です」

「…………へ…………」

『愁傷様、
友人。

16話（後書き）

後悔先に立たず。

赤夜達の友人は常にこうなる。
きっと、運命なんですよ。

「姉さん！ 何、勝手に家に入ってるの！？」

「御免なさい、緑蘭。大丈夫、匂夜君に入れてもらつたから」

「あなたッ、何勝手入れてるのツ！！ て、何、姉さんにかしづいてるの！？」

「義姉さんだし・・・・、それなりのおもてなしをしなくちゃ・・・・。
俺が死ぬ・・・・」

匂夜さんは最後の言葉は小さく言つた。

今日、いきなり姉さんが来た。あの子たちが学校行つている時でよかつた。あの赤夜でさえ、調子が狂う、と言つていたし。「聞いて、緑蘭。息子が離婚の危機何だけど・・・。どうしたらいい？」

「何で、そんな大事を私に相談するのよツ！！」

「貴女以外に頼れる人が居ないのよ」

「だからって・・・・」

本当に姉さんはマイペース過ぎるわ・・・。でも、離婚の危機つて、何が合つたのかしら甥っ子に・・・。

「で？ 黒蘭はどうして、離婚の危機なのよ？」

黒蘭は私の甥っ子。相変わらず可哀想な名前。

「今更、好き嫌いで、喧嘩したみたい」

「下らないわねッ、激しく下らないわねツツ！！」

何で黒蘭はそなこと喧嘩したのかしら？ 下らないにも程がある。

「それがね、なんか好きな芸能人、嫌いな芸能人が一人共真逆で、

それで喧嘩したみたい」

「内容もアリないなこわねッ……」

黒蘭の馬鹿ああ————つ——

後日。

「離婚しちゃった」

「阿呆おおお————ツ——

めつこやよ、こんな姉と甥はー

17話（後書き）

大分、話がぶつ飛んでいますが、気にしないでください。
と言つか、気にしたら負けです。

「白夜ッ、可愛いぞ！　今すぐ女になつてこいッ！　俺と結婚しよ
うッ！」

「へー？」

「死ね、黒蘭ッ！」

「ゴフウッ！」

着て早々、黒蘭兄さん死亡。（初出演だつたのに・・・・・・。
『愁傷様・・・・』）

「勝手に殺すなあ――――――ッ！」

黒蘭兄さんが久しぶりに会いに来てくれた。だから俺は凄く嬉しくなつて、悶えている黒蘭兄さんに飛びついた。

「黒蘭兄さんッ久しづりッ！！　会いたかったです
「お前完全にさつきの言葉無かつたことにしたろ・・・・？　まあいや、久しぶりだなッ白夜、可愛いぞ、愛してるぞ、今すぐ女になれッ！」

「それは厭」

俺は笑顔でそれを断る。それになんか後ろが怖い。赤夜と黑夜が殺氣だつてる。

「黒蘭、お前、白夜から離れる・・・・・・」

「黒蘭さん今すぐ、兄さんから離れて・・・・ッ！　じゃないと殺すよ・・・・・？」

「赤夜が怖いい――ッ！　従兄弟の兄さんに対してそれは無いだろ・・・。あと、黑夜も珍しく切れてる・・・・、恐いッ！！

「それは断る。俺も白夜と触れあいたい。ああ、白夜、また一段と可愛くなつて・・・・」

「嬉しくない・・・、嬉しくないよ黒蘭兄さん・・・」

「今すぐ嬉しくなれ」

「無理だよ・・・」

「無理? まあ、取り敢えず未来の嫁となれ、白夜」

「黑夜、今すぐチョーンソー持ってきて。本当に今すぐ」

「判つた」

「待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待つんだ二人」

俺は悪寒を覚え、二人を止めた。物凄く厭な予感がした。二人は此方をクルリと向いた。俺は一人の顔を見て、引き攣った。だつて、二人は眼が・・・、眼が据わっていた。

「判つた。じゃ、兄さんから黒蘭さんから離れて」

「・・・・、判つた」

俺はもう赤夜に逆らうべきではないと思い、黒蘭兄さんから離れた。すると、黒蘭兄さんは大ブーイングした。

「ええええ――、離れちゃうのか? 離れちゃうの白夜・・・?」

「離れます」

「お前、変なとこ頑固だよな・・・」

黒蘭兄さんは俺のことを上目づかいで犬の様に睨んできた。

「赤夜の頼みごとなので・・・」

俺はニツコリ笑つた。赤夜が頼み事するのは珍しいから、出来るだけ聞いてあげたいし・・・。

「お前等そろつてプログラモンかよ・・・」

「え?」

黒蘭兄さんが何かぼそっと呟いたみたいだけど、俺は聴こえなかつた。ただし、二人は聴こえたらしく、黒蘭兄さんを足蹴にしていた。

「ふざけないで下さい・・・、幾ら年上だとしても、容赦しません

からね・・・」

「今すぐ帰れ、黒蘭・・・・・・・・。帰らなかつたら今すぐ此処で殺すぞ・・・・」

「殺されるのは御免だ。じゃ、俺は帰るかな・・・? じゃあな三
人共」

「バイバーイ」

「・・・・・・・・・・」

黒蘭兄さんは最後に意味ありげな眼をしていたけど、俺は気にしないことにした。黒蘭兄さんが帰った後、何故か一人して俺に抱きついた。

「おわッ!!? な、何・・・・! ?」

「何でも(ない・ねえ)・・・・」

「・・・? そつか、ならいいや。二人共、御飯食べよっか?」

「うん・・・・・・・・」

俺がそう言うと、二人は顔を上げて、笑つた。やっぱり、此の二人と・・・、家族と一緒に居る方がいいや・・・。

後日、黒蘭兄さんが食中毒になり、入院したらしい。大丈夫かな・
・?

1-8話（後書き）

結局全員ブラコン・・・。
ま、大丈夫。ツンデレが一人程居るし。
大丈夫ですよね！？

此處最近、兄さんが拳動不審氣味……なんか心配……。

「兄さん、なんかあつたの？ 此處最近様子変だよ……？」

「えッ！？ な、何でもないッ！ 本当に何でもないッ！！」

兄さんはそう言つて、走つて、案の定転んだ。あ、なんか久しぶりに転んだの見たや。

オマケに黒夜達もなんか様子が変。僕を疎外しているようで……。なんか地味に寂しい……。と言つか本氣で寂しい……。

「何さ……、皆して……」

僕は本氣でいじけた。

いい加減切れて來たかも。ヤバい、幾らなんでも怒らずには居られない……。父さんと母さんまで僕を疎外し始めた、完全に。イラつく……。僕、何かしたかな……？

「何だよ……。何でオレがこんなにイラつかなきゃなんねえんだよ……」

僕はついつい、一人称を変えてしまった。切れた時、よく『オレ』と言つてしまつ。そして、僕は握っていたシャーペンを握り折つた。

皆が僕を疎外し始めて一週間たつた。なんか今日、あつた様な気がする。なんか行事あつたかなあ……？ 何だつたかな？

「おい、赤夜。お前今日『誕生日』だよな？ ハッピーバースディツ！ 赤夜ツ！」

僕は友人の言葉に眼を見開いた。

「え・・・・・？ 今日、僕誕生日だっけ・・・？」

「ん？ 携帯に登録してあるし、合ってるぞ。今日お前は17歳になつた」

「あ・・・・・」

もしかして・・・・・。

僕は顔が明るくなるのを自覚した。なんか家に帰るのが楽しみ・・・・・。

案の定、帰つたら熱烈歓迎された。

「――ハッピーバースディッ！ 赤夜（兄）ツ――！」

僕は皆がクラッカーを鳴らしたと同時にとても嬉しくなつて力一杯笑つた。

「・・・有難うツ！ 皆ツ――！」

僕は忘れない。此の誕生日を。皆が祝つてくれた、誕生日を・・・。ただし、馬鹿みたいにいじけた自分の姿は完全に記憶から抹殺す
るけど・・・。

19話（後書き）

なんか、赤夜がいじけると、調子狂う・・・。
何故でしじう・・・・。

「白夜一、ちょっと頼みたいことがあるんだけどー」

-
h
?

俺は母さんの娘がある方へ顔をのぞかせる。今田は創立記念田で休み。

「うう。珍しく、だから、届けてくれない……？」

母子ノバニ

母さんが作り忘れる」となんて、今までに一度もなかつたことなので、俺は吃驚した。

一
みくね
白夜

母さんはニコニと笑つて、一人分のお弁当を差し出した。俺はそれを受け取り、行こうとしたら引き留められた。

「待つて。髪、整えて行かないと……」

「えー。前に女じきねーから二年生

「达也。野の子で、股も足も、并

「…」
黙目よ。男の子でも整えなきやよ。赤夜と黒夜もしてゐでしょ? 確かに赤夜達は多少、ピンでとめたりもするが・・・。

母さんは俺を自分の膝の上にのせ、髪を梳かし始めた。

職業人論

俺は顔を紅潮させた。母さんはお構いなく髪を梳かし続けた。「じつて、貴方私よりトセーニジもの。丁度一一一・・・・・

可憐。あ、三ツ編みにしたやつだ

一
母さん

十分後、母さんはやっと俺を解放してくれた。

俺は城かと思うぐらいの大きい学校の前に居る。流石国立だわー。
「赤夜になんか言われるかもだけど、いいか・・・・・。済みません、身内に物を届けに来たんですけど・・・」

俺は門番の人に用件を伝え、入れてもらつた。

「・・・・・玄関・・・だよな・・・・・・・・・・?」

自分の学校の玄関の何倍もある広さに唖然としていた。

「今授業中かなー? 静かだし・・・・・」

廊下をのろのろ歩き、赤夜達の教室を目指す。赤夜達はトップクラスの△クラスのもつと上のスペシャル△クラスで、特別校舎らしい。

「我が弟ながら恐ろしい奴ら・・・・・・・」

キーンゴーンカーンゴーン・・・・。

「あ、チャイム・・・。急いだ方がよさそう・・・」

俺は得意な競歩で赤夜達の教室に急いだ。そして、転んだ。

「黒夜ー、僕弁当忘れたー」

「赤夜兄ー、俺もー」

グウウウウ・・・・・・。

「「うつわ・・・・・・・」

「あ・・・。見つけた」

俺はなんか話している赤夜達を見つけたので腕を振りながら呼んだ。

「二人共ー。やつほー」

「！？ ハアツ！？ (白夜・兄さん) ツ！－ 何で此処に(

居んだよ・居るの)－！？」

おおう、一人は物凄く吃驚していた。当たり前かな・・・?

母さんが届けてくれって。だから届けに来た

「だからって何で（白夜・兄さん）が（来るんだよ・来るの）ツ

!

「創立記念日で休みだから？」

二人が何を慌てているかはさっぱりだが、俺は簡潔に、簡単にあ

「わ」と答えた

「可その超長ハ留意……」

俺は一人をじとじと睨んだ。すると、いきなり知らない人から声

をたにられた

ねーねー君此處の子しやないよねー? 何んて居るのー?

俺はどうしたらいいか判らず、おどおどした。早く帰りたいのに、

帰らないと二人に迷惑がかかりそうで・・・・・。

福樂達と一緒に居るね 何 知り合い ? なに紹介し

「やうやく、こんな可愛い子、滅多に居ないぜ・・・・・・」

一人の男は俺をじっと、見つめてきた。俺はそれに人知れず寒気

を感じ、鳥肌がたつた。

ツ！？

赤夜が叫んだので俺は吃驚した。うわあ・・・、物凄く赤夜が怒つてるよ・・・。黑夜も結構殺氣だつてるし・・・。二人共怖ッ！！「さ、行こうか、兄さん・・・。黑夜も・・・」「

גָּדוֹלָה • • •

俺は赤夜に促されるまま、動き出した。黑夜もあとに続く。

「これからは母さんに頼まれても、絶対に一人で来ないでねッ！
変な狼に喰われるからッ！！ 最近は綺麗なら性別関係無しつゝて

奴が多いんだからね！！」

「はい、判りました・・・」

何故か俺は感謝されずに、赤夜に説教されて、学校を後にした。

20話（後書き）

白夜は本当に男なのだろうか・・・?
作者でも謎・・・・。

それは、ホームルームHRの時きの出来事だった……。

「……、メイド喫茶きっさ…………？」

「そ、メイド喫茶。お前もメイドとして、動けよ？」

「んな……ッ……」

そんなの……、そんなのばれたら赤夜達に馬鹿まかにされるじゃないか……！

といふことで、学園祭がそろそろ始まります……。

「…………メイド喫茶…………？　ふざけなこいでよ。絶対こやらないでよ、兄さん」

話したら、赤夜に怒られました。……何故？

黒夜も黒夜で、聞いたら無表情になつてしまひ、母ちゃんは何時もより笑顔。怖過ぎる。

「うん。俺も全力で拒否したんだけど、先生が拒否権は無くて……

……何か二ヤつこいたけど……

ギキイイツ……

「…………赤夜…………？　どう、したの…………？」

「…………別に…………？」

“別に”つて感じじゃないだろう……。何も無ければ、湯呑を握りつぶす必要もないわけで……。つていうか、握りつぶしたのツ！？　湯呑をツ！？

母ちゃんも持っていたペンを折つりやつてるし……。黒夜

もさつきよりも態度が悪くなつてゐる・・・・・。テーブルに足置いてゐるし・・・。

「白夜・・・。私、明日学校に乗っこもつと思つてゐる・・・。いわね?」

「否、よくないし。大体、そういうとき、了承得ないでしょ・・・」

「そうね。取り敢えず、お父様の権力を行使するわ・・・」

「其処でジイちゃんを出さないでよッ!」

俺は何か今回は皆様子が変だなと思ひながらも、言葉を続けた。「取り敢えず、クラスの皆から頼まれちゃつたし、先生も頼んできだし、やることにした・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

怖いんですけど。皆さんそろつて無表情で睨むとか、怖過ぎるから・・・・・・・。

本当に、今日の母さん達は変だつたな・・・・・。

21話（後書き）

鈍い白夜。

きっと赤夜と黒夜と匂夜と緑蘭が来るに
違いない・・・・・。

22話（誕生日）

お園祭ねえ。
わあ、どうしたの事かい・・・。

「相変わらず、ヒラヒラだよなー・・・」

俺は力なくそう呟いた。

俺はクラスの姉が作ったといつ、メイド服に身を包んでいた。しかもガーターベルトもオマケで付けている。スカートが短い所為で、思いつくそガーターベルトが見えるんですけど・・・！ 恥ずかしい・・・・。

「可愛いねー。流石、白夜ちゃん！」

「神崎さん・・・。俺男だから嬉しくない・・・。」「

「そーお？」

彼女は神崎白蓮。はくれん碧と紫を足した様な色の綺麗な髪色をしていて、瞳は碧眼。学年で一番可愛いと曰われている（らしい）。

「神崎さんが方が可愛いと思うけどなー？」

「うん？ そう？ 有難う！」

神崎さんは綺麗な笑顔を俺に向けると、突然、慌て始めた。「わ、わ。白夜ちゃん、私ちょっと用事あるから、御免ね！」

「あ、うん・・・。」

神崎さんは颯爽さっそうと教室を出て行つた。どうしたんだろ、何があつたのかな？ そう思いながら、俺はクラスの準備を手伝つた。

学園祭、始まり始まり

。

22話（後書き）

此処で終了。

きっと友人に怒られるな・・・。

「い、いらっしゃいませー。3-Eの喫茶店、足休めに来てはいいかがでしょー？」

俺は店の宣伝をするために校舎を歩きまわる。所々に俺を見ては顔を紅くしている奴がいた。何故？

「ね、君。お店の宣伝してるの？」

見れば判るだろ。俺が言うのもあれだが、馬鹿だな。

「はい。あ、貴方達も来てくれますか？ 只今、サービス中ですので、行つてみてはいかがでしょうか？」

俺は笑顔で言つた。すると、男一人は顔を紅潮させた。・・・・・

・ 何故？

「取り敢えず、そんな仕事ほつといてさ、俺達と遊ぼうよ。ね？」
「は・・・・？ む、無理ですよ・・・・。仕事中ですし・・・・・・。」
今日はずっと忙しいので・・・・

今日は何故か俺はずつと働かせられるはめになつた。明日は一日中遊んで、明後日は午後だけ仕事で、其の後、じゅぎやまつ後夜祭だ。

「いいじゃーん。ちょっと位さー。遊ぼうよー」

「げ、肩掴んできた。気持ちワリ・・・・・。こいつは悪質な奴らつているんだよなー・・・・・・。しちうがない。

「申し訳ありません。店に来ないと言つのであれば、用は御座いません。離して下さい」

俺は笑顔で、何時もより少し声を低くして、言つた。

「・・・・！ そんなこと言つていいいのかなあ？ 君はお店が大事じやないの一？」

「・・・・！ そんなこと言つのであれば、来て下さいね？ 来ないと言うんでしたら、今すぐ離して下さい」

俺はもう無表情で幾分か声を低くした。男一人は少し物怖じした

が、諦めずに突つ掛つて來た。俺は流石に厭になり、ふう、と溜息を吐き、身体を低くさせ。

「は・・・?」

男の身体が宙に浮く。ズダンッと音がし、男は何が起つたか判らずに、ほけーとしていた。

「では、失礼します」

俺は其のまま踵をかえしたが、聞き覚えのある声が聴こえた。

「兄さん!!」

俺が振り返ると、赤夜と黑夜、母さんと父さんも居た。

「あ、皆一。来たんだー」

俺は物凄い笑顔で手をぶんぶんと振った。そして、

「「「「こんの、馬鹿つ!!!!!!」」「」」

怒鳴られました。何で!?

「無事でよかつた・・・。というか、うわあ・・・。兄さん、『珍しい』ね・・・。人を投げるなんて・・・」

赤夜は未だに呆けている奴を見た。

「ああ、久しぶりに投げたから、肩が痛い・・・」

「白夜は滅多に人投げねえからな・・・」

黑夜も殺氣のこもつた眼で男を見た。

「もう、白夜が人を投げてるから驚いたのよ・・・」

「驚かさないでくれ・・・」

母さんは少し俺の頬をつまみ、父さんは乱暴に頭を撫でたきた。

「ごめん。ごめん・・・」

確かに、俺にしては珍しい事をしたかな?

そして、家に帰つたら、皆に追加説教をされました。
何でや・・・・・・。

23話（後書き）

実は白夜は物凄い怪力で、柔道とかもやってたり・・・。
ま、宝の持ち腐れですが・・・。

24話（前書き）

ちよつと遅いけどクリスマスの話。

今日はクリスマス、聖夜だ。

家では、毎年ケーキは手作りで、ローテーションして誰かが作ることになっている。今年は俺が作る番だ。と、いつことで皆でお買いもの。

「皆でお買いものは久しぶりねー」

「ああ、こうやって休みがとれてよかつた」

「白夜、転ぶなよ?」

「ホント、転ばないでよ、兄さん」

「酷いよつー！」

俺たちはワイワイ喋りながらスーパーへ入って行った。中は完全クリスマスマードで、レジの人もサンタ帽をかぶっている。なんか一人、異様に厳つい男の人が居るけど、気にしないでおこづ。

「今年はチョコケーーキね。ビターチョコ！」

「兄さん、僕が苦いチョコ嫌いだと知つていてそれを選ぶの？ 手作りは物凄く嬉しいけど、ビターチョコは嬉しいない」

「・・・判つた。普通の甘いチョコにする・・・・・」

何で赤夜は辛いものと苦いものが嫌いかなー？ 美味しいのにー。

「よし、こんなものかな？ さ、レジ行こっかー」

俺が振り向くと、皆各自の好きな所へ行っていた。

「居ないし・・・・・・」

これで歩き出して迷子になつたら皆に怒られるし、此処で他の物でも見ているか。 あ、可愛い包装紙がある。来年のバレンタインにでもチョコつくつて皆さんあげようかな？ あ、神崎さんにもあげよう。

「さて、皆遅いなー」

そう言つた矢先、

「 「 「 「（白夜・兄さん）——！　これ（買つて・買え）——！」」
「皆俺の自腹と判つててやつてるの！？　悪質だよー！」

追加、ケーキ当番は材料は自腹である。変だな、これ。

「・・・、何でココア飲むのにいちいち汚す兄さんがケーキだけは上手く作れるかな・・・・？　というか、料理全般作れるよね・・・？」何でココアだけ破滅的？

「 「 「 「 「 「 「

「止めようよ、其の沈黙・・・・。取り敢えず」

「 「 「 「 メリークリスマース！——！」」

ケーキは皆で美味しく頂きました。まーる。

24話（後書き）

楽しかった、書くのがとてつもなく、楽しかった。
今度は新年会を書きます。
その間に何か書くと思いますけど。

「冬将軍、去れやあ——————！」

「我が唯一の弟、黑夜が、炬燵にもぐり込みながら、マスクをしつつ、外に向かつて叫んだ。

「黑夜、喉を痛めるから、叫ぶのは止めよつね？」

「はーい・・・」

只今、風邪知らずであった黑夜がおとついから風邪をひいています。

兄さんは今まで風邪をひいたことがない黑夜を四六時中、看病をしている。僕はと言つと、体調の悪い黑夜の為に、おかゆを炬燵に入りながら、ガスボンベで作っていた。だつて、キッチン寒いんだもん。

「御免なさい、赤夜兄・・・。風邪なんてひいやぢやつて・・・・・・・・

「いいよ、黑夜は滅多にひかないし、たまにはいいんじゃないかな？」

僕が微笑んで、優しく頭を撫でてやると、黑夜は「うー」と唸つて、少し炬燵に顔を引っ込めた。僕はそのまま、おかゆを煮詰めた。実際、炊飯でも出来るんだけど、せつきた通り、寒いからと、こうしてれば、黑夜の傍に居られるしね？だから、じつやつて作つてるんだよね。

「そろそろいいかな？兄さんー、悪いけど、深めのお皿持つてきてー」

「はーい、判つたー」

兄さんは、返事をして、皿を持ってくれた。此処最近、兄さんが転んでるところを見なくなつた。・・・楽しくない・・・・・・・・。

「黑夜、御飯食べる前に、体温計つて
「んー・・・」

黑夜は身をよじりさせ、炬燵から出で、兄さんから体温計をもひこ、
計つた。

「・・・ 38 6分か・・・・・。高いね。もう少し寝ててね?」

「んー」

「黑夜、はい、おかげ。少し熱いからね。気を付けて」

「んー・・・」

終始黑夜の返事は浅かつた。

「すう・・・・・・」

「ゆづくつ寝てるね。よかつた。最初の時なんて、靡されてたもん
ね」

黑夜は最初の一 日は寝てもずっと苦しいのか靡されていた。家
族で心配になり、黑夜を囲んでいたつけ?

「じゃ、僕らも寝よつか? 兄さん」

「うふ。そうしよ」

僕と兄さんは上に上がつて、寝た。

次の日、黑夜はすっかり快復した。だけど、兄さんが風邪をひきました。

25話（後書き）

風邪つひき黒夜。
書いていて楽しかった・・・。

「新年会・・・、そろそろだつけ？」

俺の咳きに皆が反応した。

「」「」「」「」

そろそろ、母さんの実家で新年会が行われる。俺たちは毎年それに出席している。

毎年、俺達の着て行くスーツが違い、其の着たスーツは終わつた

「今年はどんなステータスにならうか…」

シャツ・・・。黑夜は白のスーツに黒のシャツ・・・。で、いいん

うん……そうね、そうしまじょう！ じゃ、父様に

俺達は母さんをじとつと睨んだ。毎度毎度、爺ちゃんを使いつぱにして……まあ、母さん……娘に甘い爺ちゃんもあれだけ

「新年会かー。そういうや、毎年三が日、ホテルで過ごしてたなー。
俺達三人でキングサイズのベッドで雑魚寝・・・」

「そだね。絶対に兄さん上半身落ちてるよね・・・・・・

「うー」

赤夜と黒夜と俺で、今縁側で雪見をしている。これも毎年やっている。吐くと、息は白い。それが、綺麗に見える。

「新年会、楽しみだなー・・・・」

「ああ、そうだな・・・・」

「だね・・・・！」

まだ、正月じゃないけど、俺達は一杯、甘酒を飲んで、寝た。

26話（後書き）

三人そろつて、雑魚寝・・・。

想像できる！

可愛いもんですね、小さい頃とかは・・・。

華やかな会場。俺たちは今、神田グループが経営するホテルに居たりする。あ、神田というのは、母さんの旧姓です。

「相変わらず・・・といふか、改築した？此処・・・」

「したらしいわよ。父様も暇ねー」

母さんがそれを云うかな、それを・・・。

「にしても、スーツ。それにしといてよかつたわー。皆恰好いい！
あ、白夜は可愛い！」

「差別だー！」

俺は泣いた。確かに、赤夜と黒夜は様になつてゐるよ！ 確かに、俺はさつき、親戚に「立派になつて・・・」とか、「七五三・・・」とか呟かれたり、云われたりしたよ！ それでも、可愛いはあんまりだと思うんだ・・・！

ついでに、俺たちは父さんが前に提案したスーツで、俺が紅のスーツに黒のネクタイと白のシャツ。赤夜が白のスーツに紅のネクタイと黒のシャツ。黒夜が白のスーツに白のネクタイと黒のシャツである。これまた、以外に似合つてゐる自分等が怖い・・・。

母さんは黒の肩だしドレスにファーのベスト。髪は軽く巻いて、頭の横で括つている。父さんは鼠色ねずみのスーツに白のベストと黒のシャツ。髪は何時も通りに後ろで括つている。

あ、俺も後ろで括つてゐるんだよな。赤夜が楽しそうに結んでくれたつけ？ 頼んだら、物凄く嬉しそうだった。不気味・・・。

「おーい、白夜、赤夜、黒夜ー。」
「あ、黒蘭兄さん！　来てたんだ！」

声がする方に向いて見ると、黒蘭兄さんが手を振つてこっちに来ていた。

「当たり前、俺だつて神田家の血縁者なんだぞ？　来るに決まつて

る。それに、白夜にも会えるしなー！」

「気持ち悪いー！」

「笑顔で云うな。そして、お前性格酷くなつてんがー？」

「気の所為です」

黒蘭兄さんはうろんげな顔して此方を見てきたけど、諦めたように、母さんに話かけ始めた。

「お久しぶりです、緑蘭さん。こないだはお騒がせいたしました・・・」

「本当に

「子が子なら、親もだな・・・・・・」

「それはお互い様よ、黒蘭」

母さんは笑顔で黒蘭兄さんを威圧しました。これは誰も勝てない。此の威圧には、父さんも勝てないのだ。恐るべし、母。

「あ、ははは・・・・ですよねー・・・・。白夜、白夜ちよつといつち・・・・・・・・・・」

「ん？　何？」

俺は黒蘭兄さんに連れられ、隅に行つた。

「で、どうしたの？」

「何で、緑蘭さんつてあんなに怖いんだ・・・・・・？　今まであんなじや、無かつたぞ・・・・・・」

「兄さんが怒らせたからだよ・・・。昔の事を思い出せねから・・・。例えば、下らない離婚の危機の話とか・・・。」「く、下らないとか云うなあ！」

黒蘭兄さんは泣きだした。此の人何歳だっけ？

「おお、白夜。スーツが『やつと』似合ひ歳になつたか！ わしは嬉しいぞ！」

「『やつと』と云われたことに嬉しさを見いだせない俺は正しいよね！？」

久しぶりに会つた爺ちゃんは相変わらず、元気だった。そういうや歳聞いたこと無いや。幾つだろ・・・？

「お久しぶりです、爺様。婆様のお加減はよろしいのでしょうか？」

赤夜が礼儀正しく云う。親しき仲にも礼儀ありつてやつだな。
「おお、赤夜。律は大丈夫だ。少し身体の調子も快復してきたからな。心配無用じゃ」

「『』無事で何よりです。爺様もお身体にはお氣をつけ下さい」

「ああ、心配有難うな、赤夜」

赤夜はニコッと笑い、後ろに退き、次に黑夜が挨拶を始めた。

「お久しぶりです、爺様。お元気そうで何よりです。今後とも、お身体には気を付けて下さい」

「有難うな、黑夜。三人共、本当に良い子じやのう。黒蘭は『元気にしてたか？ 爺い！』と云つてきあつたからな・・・。」「・・・」「今すぐ、勘当すべき！」「・・・」「・・・」

「わしも、それは思つておる・・・」

つぐづぐ、可哀想な黒蘭兄さん。というか、自業自得？

その後爺ちゃんの挨拶が終わり、各自に雑談を始めた。俺は赤夜を黒夜と一緒に行動していた。だって、一人が離れないんだもん。

「やっぱり、三人は可愛いわねー。ねえ、兄さん」
「そうだね。紅蘭」

声が聴こえた。其の声に、俺達は身をすくませ、恐る恐る振り向いた。其処には『の人達』が居た。

27話（後書き）

はい。変な所で終了ですね。
続きは明日更新をしますね。

「一、紅蘭さん・・・青蘭さん・・・・・・」
「お久しぶりね。白、赤、黒。元気そうで何よりだわ」
「ほんと、元気そうでよかつた・・・・

此の人は母さんの姉と兄の紅蘭さんと青蘭さん。此の二人は一卵性双生児なのだ。

「お、お久しぶりです・・・。紅蘭さん、青蘭さん・・・・・。
そちらもお変わりなく、元気そうでなによりです・・・・・・」
おおう、赤夜の笑顔が引き攣つてゐる。相変わらず、此の二人の事
苦手だよな、赤夜・・・・・・。
「クス・・・其処まで怖がらなくていいのよ? まったく、小さい
ころとなんら変わっていないわね・・・・・・」
「だね・・・・。ああ、白夜・・・可愛いね。スーツを着てるんだ・・
・・・・・。ドレス着てくれればいいのに・・・・・・」
「酷いです、青蘭さん・・・・・・」
青蘭さんは俺の髪を梳くのが好きなのか、ずっと梳いてゐる・・・
。そういや、母さんに会つた時もずっと梳いてゐる・・・・・。
髪が好きなのだろうか? あ、此の人美容師だった。

「あ、兄さん、姉さん・・・。久しぶり、元気そうでよかつね・・
・・・・・」

おお、助けとなる母さんが登場。赤夜が無意識に安堵していた。
俺と黒夜は少し赤夜の背中に手を添えた。

「「緑蘭！ 久しぶり（ね・だね）！ 相変わらず、可愛い（ねえ・なあ）・・・・・・」」

此の溺愛^{できあい}ぶりつたら・・・。神田兄妹の中だと母さんが断トツ美人なので、紅蘭さんと青蘭さんはとても可愛がっている。

「ほんと、かわいいわねえ・・・！ ねえ、兄さん！！」

「だね、可愛いね。流石、僕の緑蘭・・・」

「何時私は兄さんのモノになつたのかしら・・・？ 謎だわ・・・・・・」

・・・

母さん、それは同感です。

「じゃ、母様の様子を見に行つてくるから。私達は帰るわね

「またね。緑蘭、白夜、赤夜、黒夜」

「「「「さよなら・・・・」」」

とことんマイペースな人等だ・・・・・・。

「久しぶりに会つた親戚の人達が元気そうでよかつた！」

「だね！」

「元気あり過ぎる奴らも沢山だつたがな・・・・」

「だねえー・・・・」

こうして、俺達の夜は更けて行つた。

28話（後書き）

神田家の話も書いて見たいですね。
ホント・・・・。

皆さんお久しぶりです、ども、赤夜テス。いかがお過ごしですか？ 僕は田下勉強と兄さん苛めを楽しんでいます。

ですが、今兄さんは受験生。そろそろセンターも近いので、僕が暇を見つけては兄さんに勉強を教えています。

兄さんがちゃんと大学に受かるように、頑張っているけど、一つ・二つ・心配なことがある。

僕は兄さんが何処の大学に受けれるか、聞いていない。

それで兄さんがもし、県外の大学を受けることになるのであれば、兄さんは僕の傍に居てくれない。それが、怖い。

「兄さん。そう云えば僕、兄さんが何処の大学に行くのか聞いていいんだけど・・・・・・」

「あ・・・・、云つてないね・・・・・・」

本当は、聞きたくない。だけど、聞いた方がけじめをつけられると思う。

「よくは決まってないけど、実家から通える大学がいいな、と・・・

・・・

「・・・・・・・ツ！」

よかつた、兄さんが家から出て行かなくて。僕は天の邪鬼だから、素直なことは云えない。

「そう。県内の大学が受かるといいね、馬・鹿・に・い・さ・ん！」

「酷い、赤夜！ 受験生に対して酷いよオツ！－！－！」

これが僕のせめての嬉しさを含んだ言葉。馬鹿だけど、大切な兄さん。僕の傍から離れたらどうなるか知ってるのかな？ 兄さん。。。

センター前の実力テストにて。

「……………兄さん、僕が此処まで教えて25点つ

て…………」

「済みませんでしたア！」

さて、どう扱けばこの馬鹿は人の教えた事をちゃんと覚えるのかな？ 本当に…………。

29話（後書き）

赤夜つて・・・。

センター前日。はつきり云つて、

死にそう・・・・・。

「あああああ、明日だああああああああつー やややややや、ヤバ
いいいいいいいいいつ！」

椅子に座りながら貧乏ゆすりをしてると、母が笑いながら「やめ
なさい」と云つて来た。殺される前に止めておこう。

「兄さん、もうちょっと落ち着きなよ。まあ、確かに？ 兄さんの
頭でセンターが合格するかは、謎だけど・・・・・。少しは落ち
着いて、挑まないと、死ぬよ？」

「酷いよ！？ 受験生に向かつてその言葉は酷いよーー！」

「・・・・・よく思つんだけど、兄さんつて、パツと見・・・・受
験生じやないよね・・・・・？」

赤夜が残念そうな、可哀想な者を見るかのような眼で俺を見る。
其の視線が居たたまれず、俺はテーブルに突つ伏す。

「酷い、酷いよ赤夜・・・・・！」

「うん、御免ね？」

「疑問形いい――――――――！」

俺と赤夜のやり取りを母さんは和やかな眼差しで見ていた。

父さんが帰宅。会社の時はオールバックなんだけど・・・、何か、
ヤーさんみたい・・・・・。

「白夜、明日センターだけど、大丈夫か？」

一心の傷をえぐらないでくれ、父よッ!!

「・・・・・済まん？」

「刀又一達聞」

俺は叫びながら床に突つ伏した。本日一回目だ。父さんは肩を揺らしながら笑いを堪え、俺の肩を軽く叩いた。十分に傷つく行為だった。

父さんが普段着に着替え、前髪を下ろし、後ろで括つて、リビングに戻ってきて、家族団欒かぞくだんらんが始まる。俺は赤夜と黒夜に罵倒されながらも勉強をする。

ああ、楽しみね、センターの結果が……」「まだ終わっていないんだけど！？」

「さて、結果が心配だな・・・・・・」

「本気で心配されてるー!?」

「河かを云ふ、第一人!!」

「皆そろつて溜息ですか!?」傷つくッ。今のが一番傷ついたッ！」

ややあつて、俺は寝た。夢をみたが、それは悪夢だつた・・・・・

30話（後書き）

センター前日。私の兄もそつなんですよね・・・。

センターが終わって、少し時間に余裕が出来た。だけど、二次試験がある…………俺はもう死ぬ。

「兄さん、そろそろ勉強しなよ？ そういうえば、兄さんって理系？ 文系？」

「…………文系…………」

「うつそだあ…………」

「聞いておいて、否定しないでくれる！？」

赤夜に叫んで、俺はソファに埋もれる。ふかふかしていて、気持ちがいい。眠気が…………。

「そお…………れつ！」

「グフオオツ！？ あ、赤夜、何をするッ！」

「？ 何つて、背中に肘鉄。勢いも付けて」

「要らないわあッ！」

赤夜は至極当然と云つた顔で云つた。本気でこんな弟ヤダ…………。

でも、勝てるとは思つてない…………悲しい…………。

「兄さんが飽きないでゼリとかやつてれば、レバテツヒトヒナничなが
なかつたのに…………」

「だつて、難しいんだもん」

「はあ…………」

「溜息とか止めよつよ。めっちゃ傷つくから」

俺は赤夜を背もたれに座つていた。其の俺の膝に黑夜の頭がのつ
ている。変な状況だ。

「まあ、白夜、落ち着け。今のお前はやるべき事がある

「？ 何、黑夜」

「死ぬほど勉強」

「判つていただけど、本当に云われると傷つく」

俺は黒夜の髪を梳きながら云つた。黒夜は気持ちいのか眼を細め

た

「ああ……」

「…………眠い？」

「ああ・・・・・すう・・・・」

「ツ！？ 寝たツ！」

木口驚

「黒夜のあづまな、裏顔、久しぶりに見だり……」

「僕もかな？」いつやつてると、本当に可愛い弟だな……」「

二
だね

俺と赤夜で黒夜の髪を梳き続けた

手を離すと眉間に皺が寄つた。・・・当分解放されそうもない。

「僕もかな？」 こうやってると、本当に可憐に

だね

俺と赤夜で黒夜の髪を梳き結

俺と赤夜で黒夜の髪を梳き結

3-1話（後書き）

黒夜の甘え。
可愛いなあ・・・。

32話（前書き）

黒夜の甘え、
2。

「不覚だ・・・・・・」

俺はソファでガックリと頃垂れた。赤夜兄と白夜は苦笑した。

事の発端は、さつき俺が白夜の膝の上で其のまま寝てしまつた事である。その間、一人は俺の髪を梳き続けていたらし。

「だつて、黑夜の髪柔らかいんだもん。触つて気持ちかつたし・・・

・・・・・」

「そつそつ、黑夜の髪は猫つ毛で柔らかいし、さわり心地よかつたし・・・・・・・・」

其の発言に、もつと肩を下げる。

「黑夜、疲れてるんじゃないの？ 薄らだけど、眼の下に隈くまあるし・・・」

「んー・・・・・・・。最近寝付き悪いのかも・・・・・・・」

「そつそつと、白夜はもつと心配そうな顔をした。こんな顔させる」と、流石に罪悪感。

「そんな顔するな。お前のそんな顔見たくなえ・・・・・・・」

「あ、御免、ちょっと黑夜が心配で・・・・・・・」

「黑夜、たまには兄さんに甘えたら？ 兄さん面倒見いいよ？」

赤夜兄がにやにやしながら云つ。俺は少し赤面させ、初めて赤夜兄を見む。

「それはいい。取り敢えず、白夜、もつかい膝枕して」

俺が云つと、白夜は眼を見開き、微笑んで、受けてくれた。

「いいよ、はい」

「サンキュー・・・・・・」

『じゅりと、膝の上に頭を置く。』いつ、男のくせに柔らかいな・・・

・・・・・。

「寝心地いい、^{ていしんじい} 低反発枕みて・・・」

「微妙に、嬉しくない言葉・・・・・」

白夜は苦笑した。だけど、文句を云わずに、膝枕をしてくれた。

たまには、兄に甘えるのもいいな。特に白夜には、な・・・・・。

そう思い、俺は意識を手放した。

32話（後書き）

少し短いかも知れません。
が、悪しからず。

そろそろ（と云つても、も「つけよつと後だけビ）聖・バレンタイ
ンです。だから・・・・・・

「おつと、大丈夫かい？ 怪我は？」

と、男子が媚こびを売つています。僕はああいうの見ていて、吐き氣
がします。

此處最近はスーパーがバレンタイン一色な為、全体的にピンクになつて
いる。行くのが億劫だ。

「兄さん・・・・・悪いけど、僕の代わりにお買いもの行つて來
てくれる？」

「ん？ いいよー」

兄さんだつたら、女子の間に紛れててもばれはしないだろう。御
免ね、兄さん・・・・・。

「あー・・・・・成、程？」

其処で疑問形になるのは可笑しいよ、兄さん。

「ただいまー。赤夜ー、何で店ん中真っピンクなんだるー？」
それを僕に聞きますか！？ 普通！
「あーっとねー・・・・・。そろそろ聖・バレンタインだからじ
やないかなー・・・・？」
「あー・・・・・成、程？」

黒夜が帰つて來た。何故かげつそり頬こけているけど・・・・・。
何で？

「黒夜？ どうしたの？」

「あ、赤夜兄ーい！ 女子怖いんですけどおーッ！！」

成程、告白を女子から散々やられたわけだ。

「しかも、先輩からも来たあーー！　あの人、ホモセクショナル同性愛者ホモセクショナルだつたあーっ

！　怖いーー！」

「怖いね、それは激しく怖いね」

僕はよしよしと黑夜の頭を撫でる。ホント此の子の髪は柔らかくて、さわり心地いいや・・・・・。

「あ、そういうえば、俺も告白されたなー」

ピタリ

確かに僕はそううう音をたてそつな勢いで身体の動きを止めた。

「・・・・・告白、され・・・た・・・・・？」

「うん。された。同じクラスの女子で、何か昼休みに呼ばれてー・・

・・・・

「・・・・・体育館裏で？」

「？　何で判ったの？」

典型的だな、おい！

取り敢えず、僕の兄さんに告白した命知らずの人を探し出せなきや・・・・・。

「バレンタインには、荷物検査するからな！ 持つてきている奴らの部活は、即刻、一週間停止だからな！」

先生のその言葉に、クラス全員が怒鳴る。

『ふざけるなああ

ツ！……！』

「ふざけているのは、貴様等だッ！」

先生、僕は貴方に賛成です。

」の発表により、一週間前からのチョコ渡しが炸裂している。此処まで必死になっているのを見ていると、物凄く関心します。

「チョコ一つだけで・・・此処までするかな？ 普通・・・・・・

「するんだよ。それ程自信作何だろ」

「手作り前提だね、其の発言」

僕は苦笑する。すると、友人はがつついてきた。

「あつたりまえだ！ バレンタインだぞ、バ・レ・ン・タ・イ・ンツ！ 年に一度のイベントに、市販のチョコ持つてくる奴がいるか！」

「いりでしょ？」

即答してやる。何を夢見てんだ、と云う眼で眼で見ながら。

「お前、夢無いよな・・・・・」

「そんな無駄な夢もつたって、しょうがないでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

流石に返す言葉が無いのか、友人は溜息を吐き、他の男子の所へ行つた。

さて、今日は兄さんと捕まえて、一緒に買い物に行こつかな？
黒夜も一緒に来てくれるかな？

僕は淡く笑い、席を立つた。

俺の学校は、結構フワーダム。

「今日は家庭は、バレンタインのチョコ作りですよ」

『イヤツタアア ッ！…』

此の学校つて……。

「わー、神楽案外上手だな
家でも料理するしね」

「ますます女っぽいな」

「さらっと酷い事云わないでよ！」

怒鳴りながらも、ゆせんの手を止めない。ちゃんと毒を混ぜないとね。赤夜と黒夜、喜んでくれるかな？

「神楽は誰かにあげんのか？」

「うん、弟達に」

「お前…………夢ねえな」

「何かなー…………」

俺は半眼になつて友人を睨む。

さ、飾り付けだ。

・・・先生、どんだけ氣前いいんですか・・・・・?

先生が用意したのは、ハート型とか星、その他の物凄い凝った型とか、チョコペン、アラザンとかのもの。勿論女子は騒ぎまくっている。

二人はアラザン好きじゃないし……と云つか変に飾りが付いているのを嫌うしな……。取り敢えず、二人の好きな型で作るか。

「あ、クマがある」

ああ見えて、黒夜はクマが好きだし、これにして……。

「あ、ウサギがある」

ああみえて、赤夜はウサギが大好きだから、これにして……。あ、顔を付けるぐらいなら、いいかな？

俺が楽しそうに作っているので（しかもファンシーなものを）、友人が質問してきた。

「お前の弟って、幾つ？」

「ん？ 17と16」

「ブツ！？」

突然噴いたので、俺が怪訝な顔をしてると、友人は叫んだ。

「お前、17と16の男に、何ファンシーなもの作つてんだ！」

「本人達が好きなんだから、いいじゃん」

「……そーだけどよお……」

未だに喰いついてくる友人に、ちょっと俺もキレた。

「別に、お前が喰う訳じゃないんだし、文句云うなよ。ウザつたいんな……！」

友人が憤りを見せたので、鳩尾を殴つて黙らせました（ニコッ）。

その後、ちゃんと綺麗に作れたので、俺は満足して、家に帰つて一人にあげました。

二人も用意していたらしくて、交換しあつたんだ。

楽しかった！

35話（後書き）

怒らせると意外と白夜が一番怖いかも・・・。

僕は自他共に認める「ラノン」だね、最初から「ラノン」だった訳じゃ無いんだ。

これは、僕の醜い小さい頃の話。

兄さんは、『近所でも有名な美少年（少女）』で、可愛いと持て囃されていた。

だけど、可愛いことばかりのは、いことだけじゃ無かつた。

度重なる誘拐、未遂、痴漢。その所為で兄さんは完全に自分の殻の閉じこもつてしまつた。

元から小児喘息とかで、家に閉じこもりがちだつた兄さん。

そんな兄さんにつけられた母さんと父さん。

僕はそれなりの体制はついていたけど、幼い黑夜は違つた。

「母さん達、また白夜だけ……するこ

“するこ”

大分心の奥に隠していた感情。

“ずるい”

“何で？”

“どうして？”

“憎い”

“羨ましい”

そんな感情が、黒夜の一言で心を一杯にした。

“殺してやりたい”

僕は、惨めだった。

兄さんが風邪をひいた為、母さん達は兄さんの部屋に籠つた。僕等の御飯を作る以外は、兄さんの看病をしていた。

ある日、それなりに動けるよつになつた兄さんが部屋から出でて、僕ははちあわせになつた。

「あ、せきやー！」

純粹無垢に微笑み、僕に近付いてくる。

「口ロシテヤル。

イナクツテシマエ。

「ち、
ん？」

「近付くなッ、お前なんて居なくなれッ！—！」

ドンッ

次に畳を開けた時には、兄さんは居なかつた。

恐る恐る階下を見ると、見慣れた白髪が床に無造作に流れている。

「に、いき・・・ん？」

名前を呼んでも、返事が無い。僕は慌てて階下へと下りる。

「兄さん、兄さんッ！？ 起きてよ、ねえ！ ・・・・・ッ、お兄ちゃん・・・ッ！—！」

その後、母さんが救急車を呼び、兄さんは搬送された。検査結果は“脳震盪”。

「御免、御免なさい、兄さん・・・・・・」
「？ 何で、せきやが謝るの？ 是は、僕の所為だよ
兄さんは笑つて云つ。

「んなつ、違つち。僕が兄さんを・・・・・・」

「ううん、僕が悪い。僕が一人に寂しい思いさせたんだもん」

その言葉に、僕は打ちのめされた。

気付いていたのだ。僕と黒夜の気持ちを。兄さんは気付いていたのだ、自分が限まれて……

「だから、せわせは悪くない」

僕は、何でこんなにも心優しい、純粋無垢な兄を恨んだのだろう?

「うむ、なさいい・・・・・お兄ちや、ん・・・・」

僕は堪え切れず泣いた。兄さんは微笑んで、黙つて僕の頭を撫でてくれた。

۱۰۷

この兄を。

優しくて、純粋な大切な兄を。

一生、一緒に、傍に居て、僕の手で、守る。

絶対に

たまには、シリアルもよいかと、思いまして・・・。

うちば、ご近所でも有名な仲の良い家族。俺も、そう思つてゐる。

さらり、と白い髪が流れる。俺はそれを手にとつて梳く。白夜は一瞬こちらを振り向きかけたが、微笑んでまた赤夜兄と話し始める。

卷之三

「……四一、かな？」
俺と赤夜児の十

「花の香りはしないからな」

明察

白夜は苦笑いをし、俺の頭を撫でる。赤夜兄も、こつちに来て、俺じゃ無くて白夜の髪を梳く。

「まあ、確かに花の淡い香りはするね。それに、さらさらだ
赤夜兄まで梳き始めたから、スペースが無い。まあ、其処は譲歩
し合いながらやるが。

「……………すう……………」

卷之三

何時かの逆だ。俺と赤夜兄はそう思つた。

俺はそれでも微笑み、梳き続けた。こうやって、健やかに寝てい
る白夜を見るのは久しぶりだ。やつぱ、母さん似だよな、こいつ。

「ホント、女みたいだよなー、」レーヴ・リード

本当にね。まったく・・・此の容姿の上、此処まで無防備だと、

護つてゐるのがたるいよ

「だな」

「いつが何も知らないうちに、俺達は血の滲むような努力をした
と云つのに・・・。返り血浴びたり、返り血浴びたり、返り血・・・
(エトセトラ)。

「まあ、こりやつて純粋で居てくれたら、いいんだけどね、僕とし
ては・・・・・・」

「俺もそう思つ

兄の様で、弟の様で、姉の様な存在の兄。

俺達にとつては、掛け替えの無い、大切な兄。

手に届くうちば、俺達の手で

37 話（後書き）

最近はこんなノリ。

さて、突然ですが。

そろそろ卒業シーズンです！

「俺もとうとう卒業かー。わー、実感わかないやー」

「そりゃ、ね・・・・・・」

黒夜が頷いてきました。ですが、

「絶対、お前と俺と同じやらえ方が違う気がする」

俺がそう云うと、黒夜は苦笑いをした。

「・・・そー、か？」

「だつて、今腹抱えてんじゃん！ 完全に抑えてるだろッ！？」

黒夜はとうとう耐えられないと云うよし、盛大に笑いだした。

も、俺泣きそう・・・・・・。

「『ラコラ。黒夜はそつまた兄さんを苛めないの。僕だつてどうにかこうにか抑えて・・・・・・』

「抑え切れてないじやん！－！」

何だろう。卒業と云う意識が遠のいて行く気がします。俺の気の所為？ 本当に！？

「それにしても。そつか、兄さん卒業、か・・・・・。もう、そんな時期なんだね

「あー、そつ云えば。そんな時期、何だな・・・・・・」

「・・・雪、降つてゐるけど・・・・・・」「」

そうなんです。今は3月上旬。なのに大雪が吹雪いています。

「・・・俺、明後日卒業式なんだケド」

「奇遇だな。こっちの高校も明後日だ」

俺と黒夜は乾いた笑みを窓に向かつて向けています。赤夜は俺等を見ながらお茶を啜っています。ああ、と同じんな兄弟。今更だけど。

「聞きなさい、白夜、赤夜、黒夜！！」

と、いきなりお母さんが入ってきました。きっとこんな豪快な母だからうちでは反抗期が無いのだ（恐ろしいと理由も有るけど）。

「で、どうしたの？　お母さん」

「フツフツフツツフー。よくぞ聞いてくれたは、赤夜！」

いや、お母さんが聞けつて云つたんじやん。

「お母さん、赤ちゃんが出来ましたあーー！」

ガッシュ

赤夜が湯呑を落とした。それ程吃驚したのだろう。

「赤、ちゃ・・・んつて・・・・・。其れ、本當・・・・・・・？」

赤夜が珍しく動搖してゐるなあ。俺も吃驚したけど。

「ええ。女の子かもつて！　嬉しいわー」

女の子か。妹か、嬉しいな、それは。あー、楽しみだなー。

「「要らないツツツツツーー！」」

二人が叫んだ。俺は二人を交互に見た。二人共、冗談じや無くて本氣で拒絕の顔をしていた。それにお母さんは溜息を吐いた。

「一人はそう云うと思つてたわ。大丈夫よ、急かさない。もう少し、時間をあげる。それまでに考えておいて」

お母さんは良い終わると、リビングを出て行つた。

「ふ、一人共、何で・・・・・・」

「要らないものは、要らない！――」

「そうだよ、僕には兄さんと黒夜が居ればそれだけでいいんだよッ。他に、兄弟なんて・・・要らないッ」

二人は各自に云いたいことだけを云つたら、自分の部屋に行つてしまつた。

・・・・・俺は、どうしたら、いいんだろ・・・・・・・?

39話（前書き）

赤夜視点。

要らない、要らない。

妹なんて、要らない。

僕にはあの二人だけで十分なんだ。

妹なんて、厄介なだけだ。

ああもつ、母さん達は何を考えているんだか。妹！？ 今更だよ。
「何で・・・・・」

あの二人・・・・・

「性行為したのさ・・・・・」

僕はハアと溜息をつく。

しかも、あの二人幾つよ。母さんは確かアラ・・・云つたら殺されそう。父さんは母さんの一つ位上だし・・・・・。

「十分な年じやん・・・何で今更・・・・・」

要らない。僕にはあの二人だけで十分。これ以上、護る者を・・・
・・大切なものを増やさないでほしい。

兄さん達でも、此の手に收まりきらないのに、何で・・・増やす
のさ・・・・・。

此の手に、収まらなければ？ 何時、居なくなつてしまつんだろ
う。

「僕は・・・・・」

怖いんだ。これ以上、

大切な者を増やして、護りきれないのが。

これ以上、此の手に収まらなかつたら・・・・・・

僕の方が、どうかなつてしまつ。

何を考えてんだ、あの両親は……。

部屋に戻った後、俺はずっとベッドのつまで不貞寝をしてくる。

一階に上がるときに見た、白夜の悲しそうな顔が、頭から離れないと……。

「あんな……顔をわせるつもり、無かつたのに……。」

自分が、あの兄に悲しそうな顔をしてしまったのが、悲しい。自己嫌悪、だな。

「あー、どうしよう……。」

合わせる顔が、無い。両親に、白夜に……。

「つづり——」

手で顔を覆う。要らない意地を張り、白夜を悲しませた。こんな、はずじや……無かつた。

俺は……怖いだけなのに、大切なものを増やすのが……。

もし？ 護りきれなれば・・・そのあと、俺はどうなる？

それを、手放してしまったら？ 見失つてしまつたら？

俺は、壊れてしまう・・・たさせさえ、白夜も護りきれないのに。
・
・
・
・
・

俺は、壊れてしまつ
絶対に

。

翌朝、皆で集まつて、家族会議をすることになつた。皆神妙な面持ちで、俺は居た堪れなくなつた。

長い沈黙を破ったのは、母さんだつた。

「」・・・・・

二人は答えることなく、俯く。どうにか、フオローをしたいけど、材料が見つからない。

すると、赤夜が口を開いた。

「僕は・・・・・只さんと 黒夜かしれば いい これ以上 家族が増えたら・・・ 僕の護るべき対象が増えて、手に收まりきらない。だから・・・・・」

それ以上は、喋らなかつた。

「そう、予想通りね。」
母下は黒夜は？」

卷之三

夜を護るので精一杯。だから、もう、要らない……」「

黒夜の闇中で醜く弱弱しく見えた

「じゃ、白夜は？」

「ふへつ！？ お、俺・・・・・？」

驚いて母さんを見ると、母さんは至極真剣に俺を見つめている。

備考

ちらりと、一人を見る。一人は俺がそんな返答をするのか、と俺を真っ直ぐに見ている。

「二人は・・・・・護れないことを、畏怖してるんだよね？」

それに、二人は頷く。

「じゃ、「

息を吸つて、答える。

「俺が、護ればいいんだよ」

「 ッ

思つてもいなかつた答えに、一人は驚き、母さんと父さんは眼を瞠る。

「だつて、そうでしょう？　俺が、其の子を護ればいい。俺は、二人に護られてるんだから」

「 ッ

一人は涙眼になつて、俺を見た。

「そして、出来る限り、俺も二人を護る。そつすれば、一件落着だよ」

につこりと笑つて云えば、母さん達は苦笑し、一人はとうとう泣きだした。久しぶりに見た一人の涙。

「もつと、甘えて、いいんだよ・・・俺の大好きな弟、赤夜、黒夜・・・

・・・・・・

可愛い弟達を抱きしめて、俺は笑つた。

「くそ、まさか白夜の前で泣くとは…………」

「僕も。失態だよ」

「可愛くなー」

眩ぐ弟達を見ながら俺は云つ。

「「可愛くないとは失礼な」「」

「じゃ、可愛い」と思つてほしーの?」

「「…………」「」

「ほら」

俺はくすっと笑いながら一人の頭を撫でる。

ああ、落ち着くなー…………。

「うわやつて、一人と…………いつも通りに過ぐせることが出来て、本当によかつた。

「一コ二コと笑つていれば、一人はちょっと顔を顰めた。

「「…………何(だよ・さ)…………」「」

「いやー、やつぱり、可愛い弟達だなー」と

「お前に弟とか、思われたくなえよ!…」

「いきなりシンモード!…さつきまでのトレモードは!…」

黒夜はきつと巷で有名なシンテレだ…………。厭だ、そんな弟…………。

「俺はシンテレじやねえ!…」

「兄さん。シンテレよりか、ヤンテレだと想つ

「赤夜兄まで何を云い出すのさ!…」

「ふふつ」

赤夜サマ、その意味深な笑みは止めて…………。いやもう、

本氣で。

「こつも通りの三人ね」

母さんが、「云ひ。俺達は動きを止める。其処には、穏やかな笑みを浮かべた母さんと、父さんが居た。

「御免なさいね、ちつときまでの事。ちゃんと先に三人で来ておるべきだったわね」

「そうだな、俺達だけで決めてしまつたのは、ちよつとまづかったな」

父さんは母さんの肩を抱きながら云ひ。・・・・・・・・・愛妻家め・

「さて、今日の晩御飯は、お好み焼きにしてしまじょうかー。母さんが云ひひと、俺達は顔を合わせて笑つた。

いつも通りの、生活、日々。

それは、何よりも大切なものの。

後書き

これにて、神楽家三人兄弟は連載を終了いたします。
これまでご愛読いただき、有難う御座います。

これは、私が小学校の時に考えたキャラで、中学にあがつて、友人に見せたところ、「これ、小説にして！」と云われまして・・・。譲歩して短編にしたところ、「連載にして！」と云われまして・・・。・・・。結局連載する事に。

コメディは苦手なので、ちょっと心配でしたが、友人が面白いと云ってくれたので、ちょっと助かりました。

それでは、これで失礼します。

2011年 4月 24日

蓮華

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8333o/>

神楽家三人兄弟。

2011年7月11日03時24分発行